

学生に身近なゲストスピーカーを招聘し、 社会貢献のイメージを具体化

2017年度秋学期ティーチングアワード受賞 対象科目：教育支援を通じた社会貢献 α

「教育支援を通じた社会貢献 α」は、主に海外における教育支援に点をあて、実際にそのような活動に携わっているゲストスピーカー具体的な活動事例を講義してもらうことで、その現状や課題、背景に関する社会構造などについて学ぶというユニークな授業である。グローバルエデュケーションセンターに設置された科目で、早稲田大学の学生であれば学部や学年を問わず誰でも履修することができる。



平山雄大

平山郁夫記念ボランティアセンター講師

多彩な「ゲスト講師」による ユニークな講義

2017年秋学期には、100名が履修した。うち6割程度が女子学生だという。平山先生によると、ボランティアを含めた教育支援活動に関心がある学生が多く、WAVOCの活動も含め、すでに何らかの活動を行っている学生も数多く履修しているようだ。

2017年度秋学期早稲田大学ティーチングアワードの受賞理由としては、アンケートの評点の平均点が全体的に高かったことや、関連科目であり、国内の問題を扱う「教育支援を通じた社会貢献 β」に関しても同様に評価が高かった点、アンケート記述回答欄において、授業で学んだ内容に関して肯定的な記述が多く見られたこと、また、ゲストスピーカーによる講義が主体ではあるが、ゲストスピーカーの人選や登壇順序に工夫がなされており、受講生の深い学びに繋がっていると考えられること、特に登壇者の選択については平山先生の経験と人脈が大いに生かされており、オリジナリティあふれる人選となっていることなどが挙げられている。

2017年度の秋学期の授業では、元JICA青年海外協力隊で現在は写真家として活躍されている関健作氏、NPO法人e-Education創業者の税所篤快氏などがゲストスピーカーとして登壇した。学生アンケー

トの「この授業で最も有意義な点は何ですか」という設問に対する具体的な記述回答としては、「さまざまな活動に取り組んでいるゲストスピーカーのお話が伺える点」や「押し付けの国際協力ではなくそこにいる人との対話を大事にするとわかった点」などの回答が寄せられていた。

学生時代の自分自身の体験が、 学生に寄り添う講義の原点に

平山先生は、自身が早稲田大学大学院教育学研究科修士課程の学生だった2006年に関わり始めた授業が原点だと語る。

「坂本達さんという、株式会社ミキハウスに勤務しながら有給休暇を利用して自転車で世界一周した方が、WAVOCの客員講師になり『地球体験から学ぶ異文化理解—ブータン王国での実践を通して学ぶ—』という海外実習科目を始められたんです。私はもともとバックパッカーで、貧乏旅行者お断りの国として知られるブータンにも関心を持っていて、「何でもやるので授業に関わらせてください!」と坂本先生に頼み込み、TAとして参加し授業運営や

実習の引率補助をさせていただくことになりました。このとき3年間TAを務めた経験が、その後の自身のブータン研究や授業実践に繋がっています」。

ちなみにブータンは「国民総幸福(Gross National Happiness : GNH)の最大化」という独自の開発目標を掲げており、近年は「世界一幸福な国」のキャッチフレーズでマスコミに取り上げられ、世界から注目されている。実際に「桃源郷」を求めて訪れる旅行者も多いが、現地では近代化に伴うさまざまな問題も表出しており、平山先生としても興味が尽きない国なのだという。

学生に近い立場で裏方として尽力し、今後の彼らの活動につなげたい

ゲストスピーカーの人選で留意していることを伺うと「どちらかという学生に近い世代の方をお呼びしたいと考えています。『身近でこういう人がいるなら自分も何かできるんじゃないか』と学生に感じてもらい、次のアクションにつなげてほしい。活動している学生もゲストスピーカーとして招聘しています。また、ゲストの方のバックグラウンドを考慮し、全体のバランスを見て話題として触れる地域や内容が分散するように気を配っています」ということであった。

内容については、ゲストスピーカーが学生のときに何に悩み、何を考え、それが今にどう繋がっているかということにも触れてもらうようお願いしているそうだ。そのため、質疑応答で学生が自分の現在の悩みを話しながら質問するなど、活発な意見交換が行われることも多いという。

2017年秋学期の授業の進め方としては、全8回の講義であったが、オリエンテーションのあと、ゲストスピーカーの講義の回が合計4回、内閣府青年国際交流担当者を招聘した回が1回、最終回でレポートとして授業中に小論文を書くという構成だった。

初回のオリエンテーションでは、平山先生の自己

紹介を含めパワーポイントでまとめた資料を配布するとともに、履修している全学生の自己紹介を実施した。100名という大人数の講義でこのスタイルをとるのは非常にチャレンジングだが、学生たちの実際の活動や悩みなどを直に知りたいという平山先生の強い思いからこのスタイルを取っている。

「はっきりとしたデータはありませんが、自己紹介を聞いていると、4割くらいの学生がすでになんらかの社会貢献活動をしていて、あとの4割がこれからなにかしようかな、と思っている、そのくらいの割合ではないかと思います。私は学生たちに近い立場で、彼らの現実や気持ちに真摯に向き合いたいし、「ちょうど空きコマだった」、「友だちが履修するということで」…といった理由でなんとなく授業を取った学生にもこれをきっかけに興味を持ってもらえたらいいなと思っています」。

実際、WAVOCの別科目を後に履修したりプロジェクトに参加する学生も多いことから、この授業は彼らが社会貢献活動に興味を持つきっかけになっていることは間違いないようだ。

ゲストスピーカーの講義の回は、まずゲストの方には早めに来てもらい、最終打ち合わせを実施。90分間の講義のうち、だいたい60分間がスピーカーの話、残りの30分を質疑応答やグループワークにあてられている。また、当日の感想や疑問をコメントシート(紙)で提出するスタイルを採用している。

このコメントにはゲストスピーカーや平山先生が目を通し、レスポンスも返すようにしているという。学生への評価は最終回(第8回)の授業中に書くレポートが60%で、これは課題に対して自分自身の言葉で深い考察がなされているかで採点。平常点は残り40%で、前述のコメントシートが評価対象となる。

「今回の受賞理由となったアンケート結果の回答を見て、ゲストスピーカーのお話がよかったとい

う意見が複数あったことは、裏方としての努力が
実ったという意味でとてもうれしく思っています。
世の中にはさまざまな活動をしている方がたくさ
んいらっしゃるので、機会を作ってお呼びしたい方
はたくさんいます。今後も学生たちの『モヤモヤ』
に寄り添い、気づきを与え、今後の彼らの活動につ
なげたいと思っています」。